

論文の和文要旨

論文題目 〈新しい女〉をめぐる日露の比較文学論的考察

氏名 ナザランカ カチャリーナ

本論文は、「フェミニズム論」及び「恋愛論」を参考としつつ、〈新しい女〉はどういう女性のことを指してきたのかという疑問に答えることを目的としている。古代社会において、女性は「弱い性」とされ、日常的に男性に頼るほかに道がほぼなかった。ジェンダー規範を拒否する〈新しい女〉は19世紀後半～20世紀初頭にかけて益々公に現れはじめたが、女性が男性と肩を並べて活躍ができるようになる以前、文学における「新しいタイプのヒロイン」がロシアにも日本にも現れはじめた。ロシア・日本文学の新しいタイプのヒロインたちから、平塚らいてうやアレクサンドラ・コロンタイのような急進的な女性にいたる、その道の一端に文学のレンズを通して注目した。〈新しい女〉は特に何が新しかったのか、女性及び男性作家はどのように新しいタイプのヒロインを描いたのか、また、日本及びロシア（ソ連）では、どのような共通点・相違点があったのか考察した。

ロシアを巡る第1章第1節では、ロシアにおいて「女性問題」が提起され、また活発に議論された時期でもある19世紀後半～20世紀初頭について述べる。ニヒリズムの代表者、「ニヒリストカ」という急進的な女性はその時代の〈新しい女〉だったと言える。ニヒリストカのイメージは、ロシア文学における新しいタイプのヒロインとなり、長い間男性の特徴だと思われてきた短髪や喫煙の習慣、そしてポリガミーなどを含み、一般的に嘲笑われていた。「女性の特徴」とされてきた優しさや感情深さ、貞操を重んじていたレフ・トルストイを含む多くの知識人は「女性の女性性」が完全に失われることを恐れ、女性の社会進出に反対していた。つづく第1章第2節では、トルストイの「アンチフェミニズム」について論じ、『アンナ・カレーニナ』のアンナの何が新しかったのか、「アンチフェミニスト」であるはずのトルストイはなぜその女性を描けたのか、考察を加えた。

日本におけるトルストイの受容が始まったのは19世紀の終わりであり、日本の近代化が始まった時期とされている。西欧思想の影響を受け、女性教育の普及、一夫一妻制の設立など、社会が激変する時代だった。女性の社会的地位に特に関係ある変化については第2章第1節第1項で論じた。トルストイの思想の信奉者だった「白樺派」のメンバーたちが関わっていた『白樺』誌も、自由結婚や男女関係の新しい在り方を説き、男性作家の立場から変化しているジェンダー観や新しいタイプの女性像が形成されていくのに一役買っていた。白樺派の創始者武者小路実篤をはじめ、夏目漱石や田山花袋などといった、男性作家に描かれたヒロインについては、第2章第1節第2項で述べた。また、第2章第1節第3項では有

島武郎を中心に、トルストイが影響を与えた当時の日本の文学者にも触れた。

育った環境や個性において非常に異なるトルストイと有島であるが、社会や宗教的な思想はもちろん、エロスの捉え方や作品におけるその描写に関して明らかな類似点がある。もともと、キリスト教における「肉」と「霊」の二元性に影響され、二人ともエロスを否定的に扱っていた。アメリカ留学中にホイットマンの詩によって有島はその姿勢を見直したが、その後もエロスを肯定しつつ破壊的な力として描写していたことが多い。有島の恋愛観やジェンダー思想については第2章第2節第1項で述べた。有島の『或る女』における葉子像は現在にいたるまで〈新しい女〉の代表と見なされてきた。有島がトルストイの『アンナ・カレーニナ』の女主人公にヒントを得て、〈新しい女〉とされる葉子を描いたというのは日本の文学研究者の間で広く知られている。つまり、「アンチフェミニスト」として度々批判されるトルストイが描いた女性像こそが日本の〈新しい女〉の先駆けになったと言えよう。キリスト教に影響された両者のエロスの捉え方などは似通っており、アンナと葉子の悲劇的な人生を描いた二つの長編に多くの共通点が見いだせることもそれによって説明できる。一方で、両者の女性の権利や使命に関する見解はいちじるしく異なっており、女性解放においても彼らは正反対の姿勢をとっていた。それにもかかわらず、「アンチフェミニスト」とされているトルストイの女性主人公アンナが「フェミニスト」有島の〈新しい女〉とされてきた葉子像をインスパイアしたのである。『或る女』の葉子のイメージには『アンナ・カレーニナ』のアンナ像がどれほど影響したのか、そして葉子はどの程度〈新しい女〉だったのか、二人のヒロインの類似点や相違点には第2章第2節第2項で触れた。

『或る女』の出版から100年以上経った現在から見ると、アンナから様々な特徴を受け継いだ葉子は実際の〈新しい女〉には見えないかもしれない。社会活動家の母親のもとに生まれ、思想家や知識人の知り合いを持ち、同時代の大部分の女性が与えられていなかった教育を受け、多くの面で恵まれたにもかかわらず、彼女は自身の才能を生かせず、自立することも自我を確立することもできなかった。しかし、『アンナ・カレーニナ』のアンナと同様に、恋愛においてのみ社会に反発し、自分の意志を貫くことができた。それはいずれの場合においても悲劇に終わったが、その原因はヒロインの性質にも見出すことができる反面、大部分の責任は女性の自由意志を抑圧する当時の社会にあるだろう。結果的に男に頼ってばかりで、自身の道を見つけられなかった葉子は、アンナ以上に同時代のジェンダー規範の苦しさを実感し、それに悩んでいた。葉子は当時よく騒がれていた〈新しい女〉として受け入れられ、女性の従順さなどという古い美德をまだ唱えていた時代にとってはスキャンダラスで新しいタイプのヒロインになった。経済的自立や参政権はもとより、「心の自由」を求めた葉子・アンナは、両者ともその後女性が意識を変えていくにあたり、重要な役割を果たしたと言えよう。

開国に続く明治時代の日本において、近代化や「四民平等」という新しい時代が始まっ

たが、日本女性は100年以上前と同様に親、夫、息子に従うべきだとされ、現在から見ると当たり前の権利を有していなかった。また、妾という形で事実上の一夫多妻制がしばらく存続していた中、女性の不倫は「姦通罪」として厳しく罰せられていた。この矛盾は『或る女』のヒロイン葉子のような時代外れの、「余計者」の〈新しい女〉を生み出した。こうした〈新しい女〉たちは大正時代の「大正デモクラシー」の環境の下で日本社会でより多く見られるようになり、活躍の場を増やすことができた。その顕著な例が「青鞥」社員となった女性作家だった。この時代、女性に関する社会的意識が変わりはじめ、日本社会そして文学においては〈新しい女〉という概念が確立された。キリスト教は女性を抑圧し、保守的な世界観を押し付けるものとして、現在の欧米や日本のフェミニズムの研究者に否定的に捉えられることが多いが、明治末期～大正時代の日本においては、キリスト教思想は逆に日本のフェミニストたちを鼓舞するものだったと言える。

当時、ロシアでは十月革命の結果マルクス主義国家が生まれ、それは女性にとって新しい自由や権利をもたらしたが、多くの男女のジェンダー意識はそれについていけず、性関係の混乱が起き、多くの場合、男性に有利だった昔ながらのジェンダー神話はまだ有効だった。女性にとって不利な「ポリガミー」はその一つの例である。社会主義と女性解放運動を結び付けた「マルクス主義的フェミニズム」という新たな路線が生まれ、その代表者として精力的な活動を見せたのが、アレクサンドラ・コロantaiであった。彼女は「新しい女」という論文を書いたほか、小説ではプロレタリアートやインテリゲンチヤといった〈新しい女〉をヒロインとして描いた。日本において彼女の作品は、社会的論争を引き起こすなど、大きな反響を呼び、『青鞥』に関わっていた山川菊枝などの日本の女性作家、特に社会主義の活動家に影響を与えた。本論文の第3章第1節では、コロantaiのフェミニズム論や彼女が描いた〈新しい女〉像、続く第2節では平塚らいてうの活躍、そして『青鞥』の女性作家が描いた〈新しい女〉の葛藤について論じる。

同時代の女性の悩みや葛藤は、男性作家の視点による「謎の女」によってではなく、『青鞥』の女性作家たちが描いたヒロイン、そしてコロantaiが描いたヒロインといった例にみられるように、女性自身の声によって提示されたおかげで、両国のジェンダー規範、またそれと戦う女性たちの葛藤が明確になっている。ロシアにおいては、フェミニストで共産主義者、革命家のアレクサンドラ・コロantaiがそうであったように、日本では、『青鞥』の発意者だった平塚らいてうは思想界や文学界、女性解放思想や社会全体に100年経った現代まで消えない足跡を残した。〈新しい女たち〉本人も、〈新しい女〉の概念をそれぞれに理解していた。「天才」の発展や「天職」を何よりも重んじていたらいてうと違い、経済的自立やセクシュアリティの自由など、同じ「青鞥」社員でも、人によって〈新しい女〉の条件も異なっていたが、らいてうが『青鞥』に与えた自由や勇気こそ、真の〈新しい女〉の特徴であるのかもしれない。